E 2

心理的空間としての公室・私室に関する研究
（第２報）公室・私室のイメージ

大阪大人間科学　○山本恵子
甲子園短大　矢沢正子

目的：本報では、公室・私室のイメージを表す50対の形容語について、各々平均値の差の検定を行い、両者の相違を捉え、そのイメージの規定要因を探り出すことを目的とする。
方法：調査対象は前報に同じ。公室・私室のイメージの把握には、住まいに関する形容語を50対選択し、５段階評定のＳＤ法として採用した。
結果：①公室イメージと私室イメージについてｔ検定を行った結果、50対の項目の内、29対の項目において、有意差が認められた（$P<0.01$）。両イメージを比較すると、公室に対して、より「楽しい」「明るい」「意欲的な」「きちんとした」「健康な」イメージがもたれている。また、本来、コミュニケーションがスムーズに展開されていることを示す形容語と考えられる「おしゃべりな」「親しい」「開放的な」「話しやすい」「にぎやかな」イメージが認められる。この点は、前報で述べた現状とのズレを示すものである。②公室イメージに作用する要因を検討すると、物理的条件としての住宅水準よりも家族の集まる頻度や、集まって行う行為の内容の方が、強く規定している。即ち、実態として家族の集まる頻度が多い群に、より「明るい」「すてきな」「安らかな」イメージが、会話のある群に、より「充実した」「すてきな」「あたたかい」イメージが認められる。こうした傾向は物理的に一定の水準を満たしていても、その中での生活行為が伴わなければ、積極的なイメージ価の向上にはつながらないことを示唆している。③私室イメージは、従来、公室の設備であったＴＶや電話が複数所有となり、個室に持ち込まれたことの影響が認められる。特に電話のある群の方がない群より、「快い」「すてきな」イメージを示した。